

恐竜と 生きた男

THE DECHRONIZATION
OF SAM MAGRUDER

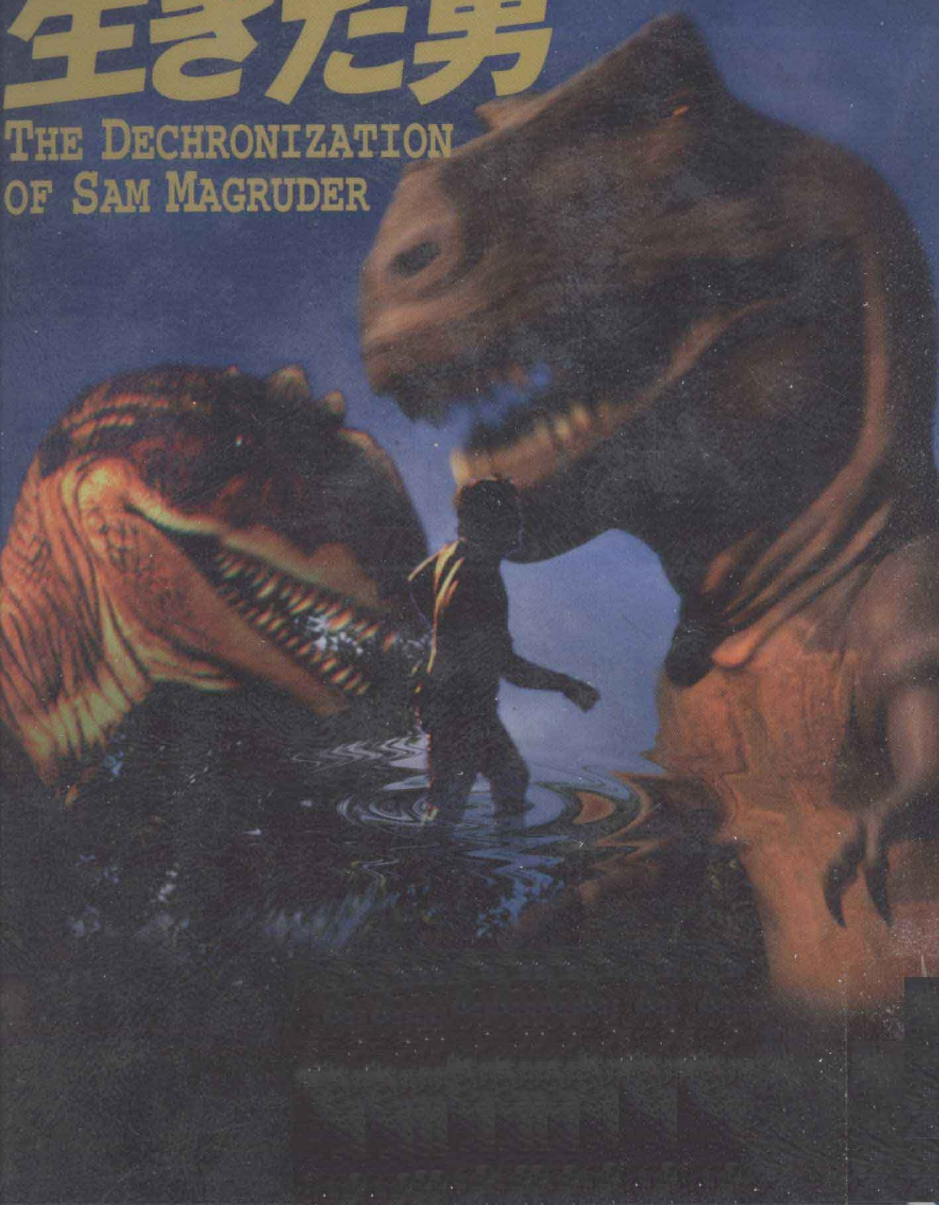
ジョージ・ゲイロード・シンプソン [著]

By George Gaylord Simpson

スティーブン・ジェイ・グールド [解説]

Afterword by Stephen Jay Gould

鎌田三平／山田 蘭 [訳]



恐竜と 生きた男

THE DECHRONIZATION
OF SAM MAGRUDER

ジョージ・ゲイロード・シンプソン [著]

By George Gaylord Simpson

スティーブン・ジェイ・グールド [解説]

Afterword by Stephen Jay Gould

鎌田三平 / 山田 蘭 [訳]

工業学院図書館
蔵書章

徳間書店

〔訳者略歴〕

鎌田三平（かまた・さんぺい）

1947年生まれ。明治大学卒。英米文学翻訳家。
主な訳書『バーチュオシティ』（テリー・ビッ
ソン、小社刊）『罪深き誘惑のマンボ』（J・R・
ランズ、角川書店）『抹殺』（ボブ・メイヤー、
二見書房）『イレイザー』（ロバート・タイン、
新潮社）ほか多数。著書『影の艦隊』（学研）
ほか。

恐電と生きた男

第1刷——1997年7月31日

著 者——ジョージ・ゲイロード・シンプソン

訳 者——鎌田三平

発行者——徳間康快

発行所——株式会社徳間書店

東京都港区東新橋1-1-16

郵便番号105-55

電話（03）3573-0111（代表）

振替00140-0-44392

（編集担当）青山恭子

（販売担当）斎藤實彌＋吉田哲彦

印 刷——長苗印刷㈱

電子組版——㈱徳間コンピュータ・ネットワーク

名 刺——真生印刷㈱

製 本——ナショナル製本共同組合

©1997 Sanpei Kamata, Lan Yamada, Printed in Japan

乱丁・落丁はおとりかえ致します。

ISBN4-19-860736-2

c o n t e n t s

恐竜と生きた男

**THE
DECHRONIZATION
OF
SAM MAGRUDER**

はじめに

時を探索する

アーサー・C・クラーク

5

第1章

絶対の孤独に閉じ込められた男の話

23

第2章

時間旅行をめぐる

33

第3章

消えた科学者

45

第4章

八〇〇〇万年前の石板

55

第5章

「第一の石板」白亜紀へのタイム・スリップ

67

第6章

「第二の石板」人類のいない世界

81

第7章

「第三の石板」ティラノサウルス現わる

91

第8章

「第四の石板」肉食恐竜との戦い

105

第9章 「第五の石板」恐竜絶滅の謎 123

第10章 「第六の石板」独りぼちに耐える 137

第11章 マグルーダーの悲劇 149

第12章 「第七の石板」人類の祖先に出会う 157

第13章 「第八の石板」最期のとき 167

解説 恐竜物語にひそむ真実 スティーブン・シグールド 171

回想 生命の意味を見つめた科学者 ジョアン・シンフン・パーンス 205

謝辞 213

この小説に登場する恐竜の名称について 215

訳者あとがき 216

藝丁||花村 広
写真提供||PPS通信社

はじめに——時を探索する^{たんさく}

アーサー・C・クラーク

一九九四年一月十五日、土曜日のこと、わたしは爆撃機の積載量に匹敵する大量の郵便物を相手に格闘していた。前日がヒンドゥー教の新年の休日、タイ・ポングルだったことが、事態をさらにひどくしていた。この郵便物のうちの二通は、差出人同士には何のつながりもなかったにもかかわらず、とりわけ密接な関わりをもっていたことになる。

一通目はわたしの友人、チャールズ・ペイレグリーノ博士からの手紙だった。彼は『ジュラシック・パーク』の根幹となるアイデア——琥珀^{こはく}の中に閉じこめられた吸血虫から恐竜のDNAを取り出せば、そのクローンを育てることもできるかもしれないという——を思いついた科学者である。

チャーリーの手紙にはゲイリー・ラーソンの漫画『ファー・サイド』が同封してあった。車が

ぎつしり停められている駐車場のところどころに、ひとにぎりほどの（これが適当な言葉かどうかは知らないが）恐竜がちらほら見えるという構図である。そう、タイトルは『ジュラシック駐車場』……。

さて、チャリーの手紙といっしょに届いた郵便物の中には、H・G・ウェルズ協会からの通知も混じっていた。『タイム・マシン』出版百年を記念して、一九九五年七月、ウェルズの母校であるケンジントン・インペリアル・カレッジで国際シンポジウムを開くので、基調講演を依頼したいというものだ。だが、悲しいかな、わたしが今住んでいるスリランカからヨーロッパへ定期的に通っていた時代はすでに遠い過去のこととなっていた。ちょうど遺憾の念を表わす手紙をつづっていたとき、郵便配達人が特別配達小包を届けにきた。

小包の中には薄いタイプ原稿があり、『恐竜と生きた男』という題名がつけられていた。この二十四時間に届いたタイプ原稿はこれで三作目であり、持ちこみの原稿を読むことができない理由が印刷してある用紙に、わたしは機械的に手を伸ばした。

だが、そのとき表紙に記された著者名が目に入り、わたしはもう一度中身をあらためた。原稿に添えられたジョアン・シンプソン・バーンズからの手紙が、すべてを説明してくれた。

同封の原稿は、わたしの父であり、先年亡くなった進化論学者ジョージ・ゲイロード・シンプソンが書いた、時間旅行ものの短編小説です。ステイブン・ジェイ・グールドからの二通の手紙のコピーも添えました。この作品のために、博士に序文となるような解説をお願いできれば……これに過ぎる喜びはありません……グールド教授はあとがきを引き受けてくださっており、博士のご助力をいただければ、教授も感激することと思います……

シンプソンとグールド両氏の高名はわたしも聞きおよんでおり、この依頼にはもちろん、おおいに氣をよくした。と同時に、当惑もした。すでに数作の大きな企画に関わっているわたしとしては、できるだけ角を立てずに断わるしかないが、いったいどうしたらいいだろう？ ともかく、一応は原稿に目を通しておかないと……それほど長い作品ではない、だいたい二万五千語くらいだろうか……。

『タイム・マシン』ふたたび

わたしは読みはじめ、とたんにのめりこんだ。シンプソン教授は、意図的であるのはまちがいないが、H・G・ウェルズの『タイム・マシン』と同じ形式をとっている。登場人物は名前では

なく、世界史学者、実利主義者、人類学者、普通の男といった肩書で呼ばれる（ウエルズが町長、医師、編集長——そしてもちろん、タイム・トラベラー時間航行者といった肩書を使ったように）。

ある意味では、執筆当時の一八九五年を現代と設定したにすぎないウエルズより、シンプソンのほうが進んでいるといえるかもしれない。いまだに誰も、少なくともCNNの最新の定時ニュースを見るかぎりでは、タイム・マシンを発明したものはいないのだから、シンプソンもその作品の舞台をわれわれにとつての未来に設定せざるをえなかった。そこが現代とはまったく異なる社会であることを、シンプソンはしばしば思いがけない場所で巧みに匂わせている。

読みすすむにつれ、わたしの感嘆は、そして感動も、増すばかりだった。シンプソンの生み出した不屈ふくのヒーローの試練に、勝利に、そして最後にたどりつく運命に。わたしの脳裏に、もう一度、『タイム・マシン』のあの魅力的なエピソードの一節がよみがえった。

《彼はふたたび過去に飛びこんでいったのかもしれない……白亜紀はくあきの海の底知れぬ深みに潜ひそっているのか、それとも猛々たけだけしくも巨大な爬虫類はちゅうるいの君臨するジュラ紀で、奇怪なトカゲたちに囲まれているのだろうか。いま、この瞬間も——あえてこの言葉を使うとするなら——彼はプレシオサウルスの出沒する魚卵石の珊瑚礁さんごしょうを、あるいは三疊紀さんじょうきのうら寂しい塩水湖のほとりを放浪しているのかもしれない》

《いま、この瞬間も！》——少なくとも半世紀前にはじめて『タイム・マシン』を読んだときから、この語句の持つ逆説めいた響きはわたしを魅了してやまない。シンプソンの空想物語からはこうした願望実現への思いがひとかたならず伝わってくる。考えてみれば、過去への旅を夢見たことのない古生物学者など、はたして存在するだろうか？

これも偶然のめぐりあわせだが、わたしはその直前、エージェントのラッセル・ゲイリンに、わたしの次作は『三疊紀の動物園』^{トリアassic Park}という題名になるだろうという、ふざけ半分の脅しをファックスで送ったばかりであり、シンプソンの原稿が届いたとき、わたしはそのちよつとした冗談が自分にはねかえってきたことを悟った。恐竜たちとふたたび関わりあうことは、わたしの意志がどうあれ、もはや避けられないようだ。結局のところ、わたしの科学への関心は、他ならぬ恐竜たちによって呼びおこされたのだから……。

もう七十年近くも前のことになるが、わたしははっきりと憶^{おぼ}えている。わが家の農場のポニーが引く小さな二輪馬車の上で、父がわたしにタバコの景品のカードをくれたときのことを。わたしの想像力が過去をなつかしんで勝手に映像を作りあげたのでないかぎり、その瞬間のあたりの風景までもが、いまもわたしの脳裏にまざまざと焼きついている。

そのカードには、とてつもなく珍妙な動物の写真が印刷されていた。トカゲの一種ではあるが、

背中には巨大な尖った扇のようなものがならんで生えている。《ステゴサウルス》という名が記されたそのカードを、わたしは長いこと大切にしていた。

わたしはその絵を眺めては、そこから靈感を得てちょっとした物語を作りあげ、気の進まない面持ちの、そして、おそらくは落ち着きのない、村の学校の級友たちにむりやり話して聞かせたものだ。これだけの年月をへてもなお、そのときのことをはつきりと思い出せるなんて、わたしの精神的成長にその絵がよほど大きな役割を果たしたにちがいない。

それから数年間、わたしは古生物学に夢中になり、化石を集めたり、近くの博物館に入り浸ったりしたものだ。その後、理由はもう憶えていないが、わたしは天文学に興味を移した。恐竜たちは王座を宇宙船に明けわたすこととなったが、それでもわたしはタバコの景品である大量のモノクロの立体写真カードを捨てはしなかった。

一九二〇年代に撮影されたにしては、その写真には文句のつけようのない説得力があった。『ジュラシック・パーク』のスチール写真にも負けないほどの。被写体のサイズを示す手がかりはなく、わたしはよく、あの恐竜たちの模型はどれほどの大きさだったのか、それを製作した、すでにその名を知るすべもない天才はどんな人物だったのかを思いめぐらしたものだ。あの写真こそ、『ジュラシック・パーク』に捧げられたある評論家の賛辞にふさわしい出来栄えだった。「どの恐竜が作りものか、あなたには見わけることができない」



もしかすると、あの景品カードはアーサー・コナン・ドイルの古典的名作『失われた世界』が一九二五年に映画化されたことに触発されて生まれたのかもしれない。あれは、たしかわたしが生まれてはじめて見た映画であり、原作は、いまだにそのジャンルでもっとも完璧な作品という地位を保ちつつづけている。

映画では、チャレンジャー教授をウォレス・ビアリーが演じており（めずらしく知能指数の高い役柄だったというわけだ）、恐竜たちはストップ・モーション撮影の先駆者、ウィリス・オブライエンの製作だった。この骨の折れる技法を得意としたのは、レイ・ハリーハウゼンがもっとも名高いが、現代ではすっかり時代遅れとなってしまった——他のさまざまな技術と同様、シリコン・バレーの魔術師たちの台頭によって。

いつせいによみがえった数々の思い出に圧倒され、わたしにはこの依頼を断わる口実が見つからなくなった。こうなれば、素直に引き受けるしか道はあるまい。

過去を変えられるか

もちろん、一九八四年にシンプソン教授が亡くなってからも、古生物学はめざましい進歩をとげてきた。最新事情の解説は、喜んでステイブ・ジェイ・グールド教授に譲ることとしよう。

とはいえ、本書の主人公であるサム・マグルーダーが（彼にとっての）未来に起こるべき恐竜絶滅の理由を推測する場面で、いまやもつとも有名になった小惑星衝突説がまったく登場しないことに、わたしは少々驚かされた。おそらく、この原稿が執筆されたのは、ルイスとウォルター・アルヴァレスがあの著名な論文、『白亜紀——第三紀における絶滅の地球外要因』が一九八〇年に《サイエンス》誌に発表される以前のことだったのだろう。

ジョアン・バーンズから、シンプソン教授がわたしの小説の愛読者だったと聞かされ、わたしは感激すると同時に、やはり時間旅行と恐竜をあつかったわたしの小品をはたして読んでもらえたかどうか、ふと思いをめぐらした。わたし自身、ほとんどその短編『時の矢』の存在を忘れていた。執筆は一九四六年、いまや先史時代も同然に思えるほどの昔だ。

シンプソンの作品を読みながら、わたしはふたたび同じ質問を自分に問いかけていた。時間旅行はほんとうに可能なのだろうか？ それとも、わたしがはるか昔に何度か書いたとおり、永遠に空想のままで終わってしまうのだろうか？

時間旅行を否定する古くからの理論はこうだ。もし、ある人間が過去にさかのぼり、自分の直接の先祖を殺したとしたら、彼自身も、そして、かなりの数の人々もいっしょに、この世に存在しなくなってしまうはずではないか。

ロバート・ハインラインやフリッツ・ライバーをはじめとする天才的な作家たちは、まさにそ

の挑戦を受けて立った。よろしい、そうした逆説が起きるものと仮定しよう。だとしたら、どうなる？ その答えのひとつに、パラレル・ワールドという考え方があつた。彼らは、過去は不変のものではないと考へた。つまり、たとえば一八六五年に戻つて、フォード劇場でジョン・ウィルクス・ブースが撃つた銃弾を、リンカーンからそらすことも可能だというわけだ。だが、そうすることによつてわれわれの世界は消滅し、かわりに別の世界が生まれる。新しい世界はわれわれの世界の歴史から分岐し、ついにはまったく異なつた道を歩むのだ。

もしかしたら、可能なかぎりの異なる世界はすべて実際に存在しているのかもしれない。それらは無限に広がる操車場を走る線路のようにずらりとならんでおり、われわれが同時に複数の線路を走ることができずにいるだけのこともかもしれないのだ。もし、誰かが後戻りし、過去の重要な事件に干渉すれば、それが切り換えスイッチを動かしたことになる、われわれの列車は別の線路を走り始めるというわけだ。

だが、ことはそれほど単純ではないとも考へられる。別の作家たちはそのテーマをさらに発展させ、たとえ過去の出来事に干渉できたとしても、歴史の流れの慣性はあまりにも大きく、結局は何も変化しないという考へ方を打ち出した。つまり、あなたはブースの銃弾からリンカーンを救うことができるかもしれない。だが、ロビーには別の南部連合国の支持者がひそみ、爆弾を手にはリンカーンを待ちうけているというわけだ。そして、またしても……。